

お問合せ先 (株) 旭川振興公社 0166-22-7198

ブラリーがいく!

皆さんは旭川市内を走る図書館のバスを見かけたことがありますか？
今回は“移動する図書館”の自動車文庫をブラリーが紹介します。

自動車文庫ってなに？

図書館から離れた地域にお住いの方や交通手段のない方にも本に親しんでいただけるよう、本を積んだバスが市内57カ所の巡回場所を訪問する図書館サービスの一つです。



自動車文庫のお仕事は？

バスに本を積んで中央図書館を出発します。1日に市内4～6カ所の巡回場所を2台のバスが分担して訪問します。訪問先では貸出・返却・予約の受付等を行います。停車時間は30分です。訪問先での貸出し等の業務を終え中央図書館に戻ると本の整理などをし、翌日の巡回準備をします。自動車文庫の本は新刊本もあります。小説や実用書、児童書を含む積載本は随時入れ替えており利用して下さる方々を飽きさせないよう工夫をしています。

自動車文庫のバスを紹介！

2台のバスには、ときわ号（2800冊積載）とあさひ号（3800冊積載）という名前がついています。
ときわ号には図書館公式キャラクター、ブラリーのイラストが描かれています。



自動車文庫を利用するには？

利用カードを持参し、利用したい巡回場所へ図書館のホームページでお知らせしている訪問時間にお越しください。



自動車文庫で本を借りるには？

利用カードがあれば個人で利用できます。1人20冊まで借りられ、次の巡回日が返却期限日になります。新規利用カードを作ることができます。高校生以上の方はご住所が確認できる身分証明書（免許証、マイナンバーカード、保険証、学生証等）をお持ちください。
※利用カードのお渡しは次の巡回日となります。詳しくは、職員にお尋ねください。



『ありがとう、さようなら』

N 司書

瀬尾まいこ / 著 メディアファクトリー

元中学校教師の小説家、瀬尾まいこさんが学校生活のあれこれを綴ったエッセイです。

1 篇がとても短くて読みやすく、ユーモアと生徒への温かいまなざしに溢れた素敵なお話ばかり。かつて塾教師をしていた私は、この本を読んでいるとまさに今、目の前に中学校の生徒が立っているかのように感じるんです。一生懸命で、ちょっと生意気で、そしてとても愛おしい。そんな中学生と瀬尾先生との心温まる交流。

すべての世代の方に読んでほしい1冊です。

『モヤモヤそうだんクリニック』

S 司書

池谷裕二 / 文 ヨシタケシンスケ / 絵

NHK 出版

この本には小学校3年生～6年生の子どもたちが、日常で抱えている「モヤモヤ」を解決するためのヒントが書いてあります。小学生らしいものから難解なものまで、そんな様々な相談・質問に脳研究者の池谷裕二先生が「脳のしくみ」を交えながら回答してくれています。「脳のしくみ」と聞くと難しい本のように思えるかもしれませんが、小学生向けの本なので分かりやすく、読みやすいです。

「小学生の頃、同じことを考えたな～」と懐かしくなったり、「こんなに難しいことを考えているんだ」と感心したり、「大人の私もそれ知りたいです!」と共感したり、読みながらいろんな気持ちになりました。回答の最後には絵本作家のヨシタケシンスケさんによる、「ふっ」と心が軽くなるようなイラストが添えられているのも、本書の魅力だと思います。

ぜひ、お手にとってみてください!

図書館で聞いてみた

あんな本 こんな本 夏



T 司書

『おもいで星がかがやくとき』

刀根 里衣 / 著 NHK 出版

絵本を読むときはどういう時でしょうか。

絵本イコール楽しいとか童心にかえるというイメージが強いかもしれませんが、この本は静かに泣きたい時におすすめの1冊です。

「あなたが探している人はもうどこにもいないの」と胸につきささる言葉がありますが、傷ついた心にしっとりと染み渡る青がベースの美しい幻想的なイラストに心がおちつきます。ページをめくるたびに、主人公といっしょに静かに在りし日の思い出にひたり自然と涙して、落ち込んでいる自分をそっと支えてくれます。会いたい人に会えない心の喪失感に静かに穏やかに寄り添いたい。

そういうときにぜひこの本の世界へ旅してください。

気になる本があればお気軽に図書館員
にお尋ねください!

いめく imek—文化の分け前— (*imek イメク…アイヌ語で「分け前」を意味)

これはカナダ極北部で、とある少数民族の調査をしていた知人から聞いた話。

その村には森でヘラジカやウサギ、河川ではビーバーなどを伝統的な方法で狩猟し、日々生活している狩猟採集民族の古老たちが住んでいました。

あるとき彼らに楽しい時間を過ごしてもらおうと、村の都市部に住む人たちが古老たちを教会のクリスマスパーティに招待しました。

会場にはたくさんの贈り物とごちそうが用意され、サンタクロースは上座に座る古老たちにプレゼントを配っています。ところがそんな和やかなパーティの席で古老たちは、終始俯いたまろくに口もきかず、だんまりとしたまま。うつろな瞳で時間を過ごしているのです。しかもパーティが終わると、そそくさと帰ってしまいました。パーティから帰った古老の一人に「どうしたの？楽しくなかった？」と聞くと、震えながら

「とても怖くて生きた心地がしなかった…」

と言うのです。

「どうして？何が怖かったの？」

「あのサンタクロースという男が怖くて、ずっと下を向いていたんだ…」

ふくよかな体型に人懐っこい笑顔。皆に等しくプレゼントをくれるサンタクロースを恐れていたなんて…と思いますが、古老たちの中ではトナカイを意のままに操ってソリを引かせるという、魔法なのか怪力なのか分からない力を持つ大男が、どんな気まぐれなのか何の関わり合いもないのにプレゼントをくれる。表情はにこやかだが、そんな訳の分からない男の考えていることが見当もつかない。もし彼の機嫌を損ねてしまったら呪い殺されてしまうんじゃないだろうか。だから目を合わせないように下を向き、くれるというものだけもらって（機嫌を損ねないうちに）すぐに帰った。ということだったのです。

伝統的な狩猟採集を生業としてきた彼らにとって、何の見返りもなしに一方的に贈り物をされる…というクリスマスの習慣は、相当奇妙なことに見えたのでしょう。

その土地には 19 世紀初頭にはすでにキリスト教が布教・受容され、古老たちも休息日には教会へ行く《クリスチャン》ではあったそうです。彼らの世界観から見て、キリスト教に付随する「無償の施し」という世界観にはまだすこしだけ抵抗があり、受容も代替も昇華もしきれていなかったということなのかな…と思いました。



← Facebook



YouTube →

